

## KINGCA WEEK 2024 ・ Master Class 参加感想記

大阪赤十字病院消化器外科

穂山 竣

この度 KINGCA WEEK 2024 および Master Class に参加させていただきました。参加に際しまして、日本胃癌学会より参加助成いただきましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。私の参加感想記が来年度以降に学会参加をご検討される先生方の一助となれば幸いです。

学会に先駆け、Master Class（施設見学）に参加し、2024年9月23日～25日の3日間 Yonsei University Severance Hospital cancer center（セブランス病院）にて手術見学をさせていただきました。セブランス病院は2400床規模で、胃切除だけで年間約1000症例近くが施行されているハイボリュームセンターでした。Da VinciはSPを含めて計8台が稼働しており、3日間の見学期間だけでも腹腔鏡・ロボットともに数多くの症例を見学できました。

まず初めに驚いた点として、Physician Assistant（PA）と呼ばれる医療職の方がロボット手術では術野で Patient Side Surgeon を、腹腔鏡手術では助手やスコピストをされており、基本的に1つの手術室に外科医が1人だけという環境で円滑に手術が行われていることでした。共通認識として手術手順などが浸透しており、30代中頃の先生がPAと2時間ほどでLPG・D1+郭清・ダブルトラクト再建をされておりました。過去の感想記でも数多く報告されておりましたが、実際に見学をして非常に刺激を受けました。

Woo Jin Hyung 先生の Live Surgery にも立ち会うことができ、フランスの学会会場とオンラインで質疑応答されながら実際に RDG を施行している様子を見学できました。ICG 点墨によるリンパ節郭清のナビゲーションや、3D 血管構築をコンソール画面の中で表示できるようなシステムを導入されており、安全性や手術手技の向上への取り組みも盛んに行われておりました。数多くの症例を日々行いながらも常に新たな試みをされており、とても印象的でした。

Hyong Il Kim 先生は腹腔鏡手術の際から Reduced port surgery を積極的に取り組まれており、Da Vinci SP での胃全摘術も見学できました。SP にてすでに120を超える症例を施行されており、定型化された円滑な手術を学ぶことができました。

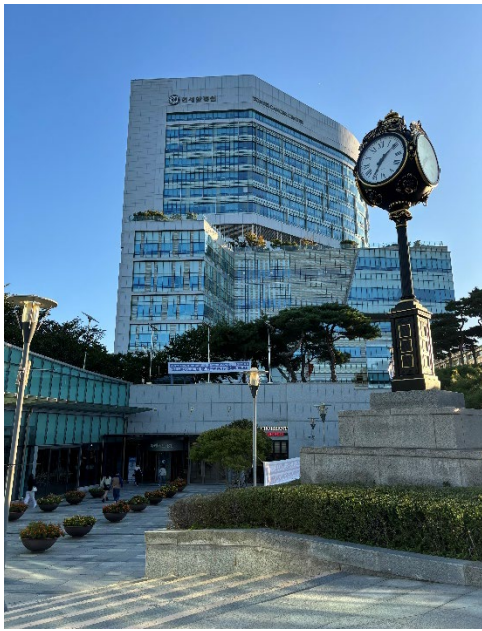
セブランス病院でも困難症例の RTG で8時間程要した症例もありました。現地での見学ならではのなかなか学会やオンラインでは知ることのできないトラブルへの対処法を体験できたとともに、手術の難しさを再認識することができました。

様々な手術手技を通して日本・自施設との手順の差異を感じることができました。韓国（セブランス病院）ではなぜこのような方法をとっているのか、逆になぜ日本（我々の施設）ではそうしているのか、改めて考え直す良い機会となりました。

また、韓国ではレジデントのストライキ問題に直面しており、スタッフの先生方にもファーストコールがかかるなど少なからず負担がかかっているようでした。その環境の中で、Woo Jin Hyung 先生をはじめ、セブランス病院の先生方には3日間連日で食事会を企画していただき、非常に温かく歓迎していただきました。心から感謝申し上げます。

9月26日からはKINGCA WEEK 2024がロッテホテルにて開催されました。セブランス病院でお世話になったYoo Min Kim先生のランチョンセミナーやビデオセッションを通して海外での手術などに触れることができました。その他海外からの多くの参加者が英語で討論をされており、医学はもちろん語学の重要性を改めて再認識する機会となりました。今回私はポスター発表でしたが、当院の金谷先生が招待講演をされている姿をみて、今後はオーラルセッションなど順を追って目指す目標ができ良い機会となりました。

最後になりましたが、今回このような貴重な経験を与えていただきました、日本胃癌学会理事長掛地吉弘先生、理事小寺泰弘先生、国際委員会委員長・理事竹内裕也先生、日本胃癌学会事務局の方々、セブランス病院、KINGCA WEEK 2024関係者の方々に深く感謝申し上げます。



セブランス病院にて



Woo Jin Hyung 先生をはじめ多くの食事会を開いていただきました      Master class 参加者と



学会会場にて      学会中の Gala Dinner にて Master Class の修了証の授与

